



グレートジャーニーで出会った

# 多様な人・家族・ コミュニティ



文・写真=探検家  
関野 吉晴 vol. 04

▶1999年2~6月 ロシア カムチャツカ地方、  
コリヤーク自治管区

【表紙写真】  
トナカイとともに暮らすコリヤーク族の子どもたち

## 遊牧民から学ぶ トナカイ橇の操縦

私は、一度トナカイ橇に乗って旅をしたかと思っていた。それは1999年の冬に実現した。

極北シベリアのトナカイ遊牧民、コリヤーク族のキャンプ地に着いた。トナカイが集まってくる、リーダーのアナトリさんが橇の扱い方を特訓してくれた。トナカイの体は思ったより小さい。西シベリアではトナカイに乗るが、そのトナカイの体は大きいという。極北シベリアのトナカイに乗るのは無理だ。トナカイ橇は思ったより操縦性が良かった。1台の橇を2頭のトナカイが引く。ハインスをたすきがけにして、橇となげる。首には手綱がかかっている、馬と同じように引っ張ったり、緩めたりして進む方向を指示する。慣れてくると微妙なコントロールができるようになった。

むちはトナカイ橇独特のものだ。細い、150センチほどのしなやかな枝の先に、セイウチの牙や



# 極北シベリアの トナカイ遊牧民 とトナカイ橇の旅

写真:トナカイの群れ。ミキノ村の人々は夜中にトナカイを山に放ち、明け方にキャンプ地や家の近くに連れてくる



アナトリさんたちの住居。家から家へ移動する時は、テントを張る



トナカイ橇を操縦している、コリヤーク族のボリスさん



コリヤーク族の女性はおしゃれで、ビーズなど華やかな装飾のある衣装を身につけている



トナカイ橇の扱い方を習う筆者

トナカイの角で作った三角形の針が付いている。むちを振るって、その針先がトナカイの右足の付け根に当たるようにする。一瞬、ぐーんと、スピードが増す。トナカイの視野は馬と同じように広い。前方に走りながら、後方も見える。いったんむちで右足の付け根を叩くと、次の数回は、むちを振り上げて叩くまねをするだけで、トナカイは奮起して逃げるようにしてスピードアップする。

特訓が終わって、いよいよトナカイ橇の旅が始まった。600頭のトナカイの群れを率いての旅だ。私は1台の橇を任された。急な上り坂では、トナカイの負担を軽くするために橇から降りて歩く。急な下り坂が厄介だ。橇には、太さ1センチほどの丁字状の先をとがらせたブレイキが付いているが、なかなか上手に扱えない。雪が軟らかければ乗り手の足の裏もブレイキに使えるが、硬いところでも速くなり、橇をトナカイの脚にぶつけてしまう。手綱などのひもが緩み、トナカイの脚に絡まる。状況によっては橇から降りて歩くほうが良い。

オホーツク海に出た。海は凍っていた。凍った海の上を走る。海岸と乱水帯の間は比較的平らなので、思い切ってスピードが出せる。凍ったオホーツク海の上をトナカイ橇で走れるとは思っていなかった。このまま、気が高ぶった。このまま方向を変えて走り続けられれば、日本に行ってしまうのではないかなどと妄想しながら走った。実際、ここからバイカル湖やアンカレッジに行くよりも、日本のほうが距離的には近いのだ。

### トナカイの赤ちゃんが生まれる春

オホーツク海から再び陸に上がり、ゴールのウスチパレン村に着いた。アナトリさんから、ミキノ村の放牧地に遊びにくるように言われた。「四季を通じて一番好きな季節はいつですか」とみんなに尋ねると、全員が「トナカイの赤ちゃんが生まれる春ですよ。その季節は魚も捕れ、動物たちも動きが活発になり、南に行っていた渡り鳥も帰ってきます。狩りにも最適な季節ですからね」と口をそろえて言う。



生まれて間もないトナカイの赤ちゃんをなめる母トナカイ

出産のピークである4月下旬、再びトナカイ遊牧民のキャンプ地に戻った。ちょうど冬营地から、彼らの本拠地であるキノ村に向かっていている時期だった。トナカイの群れのすぐ横に、ストーブ付きのキャンバステントを張る。子トナカイにとっては、オオカミだけでなくキツネやカラスなども脅威になる。昼夜を通して、外敵から子トナカイを守らなければならぬ。

トナカイの出産を見た。まず前脚2本、それから頭が出てくる。それから、少し時間がかかる。母トナカイは立ち上がったまま、狭い範囲を動き回る。やがて子トナカイが地面に産み落とされる。子トナカイはすぐには立てない。母トナカイはまだぬれている子をなめる。そのうちに子トナカイは前脚を突っ張って立ち上がろうとする。

放牧地では、早速トナカイを殺すことになった。今回は銃で射止めた。投げ縄を使うとトナカイが動き回り、子トナカイが踏み付けられる恐れがあるからだ。トナカイを解体すると、半分は自分たちの分、残り半分を女性たちに譲った。

放牧地では、早速トナカイを殺すことになった。今回は銃で射止めた。投げ縄を使うとトナカイが動き回り、子トナカイが踏み付けられる恐れがあるからだ。トナカイを解体すると、半分は自分たちの分、残り半分を女性たちに譲った。

冬营地を移動する直前、50キロ離れたウスチパレン村から女性が二人やってきた。海岸部では、今

厳しい生活環境下、手を差し伸べ合ってもに生き抜く

アナトリさんたちの夢はトナカイを増やすことだ。しかし、オオカミが増えるとトナカイは増えない。トナカイ遊牧民たちはトナカイを飼うだけでなく、オオカミ狩りをし、魚を捕る。主なたんぱく源を狩猟や漁労で調達することによって、トナカイは食べないようになっているが、野生の肉や魚が手に入らない時は、トナカイを殺さなければならない。本当はトナカイを売って、現金収入にしたいのだが、ほぼ自給自足で、暮らしていくのがやっとだ。苦しい暮らしでも、さらに苦しい立場の人には救いの手を差し伸べるアナトリさんに「優しさと強さとどちらが大切ですか」と尋ねると「もちろん優しさのほうが大切ですよ。強さはそれだけでは何の役にも立ちません」ときっぱりと言った。

苦しい環境のなかで人々は協力し、自然とも調和を取り、超自然的世界に対しては、畏れ、祈りながら、到底生きていけないように見える土地でしっかりと生きていた。

**Yoshiharu Sekino**

1949年東京生まれ。一橋大学在学中に同大探検部を創設し、アマゾン全域踏査隊長としてアマゾン川全域を下る。1993年から、アフリカに誕生した人類がユーラシア大陸を通過してアメリカ大陸にまで拡散していった約5万3千kmの行程を廻行する旅「グレートジャーニー」を開始。南米最先端ナバリノ島を出発し、10年の歳月をかけて、2002年2月10日タンザニア・ラエトリにゴールした。「新グレートジャーニー 日本列島にやって来た人々」は2004年7月にロシア・アムール川上流を出発し、「北方ルート」「南方ルート」を終え、「海のルート」は2011年6月13日に石垣島にゴールした。